

「オネエ所長の調査ファイル」 # 3 1

山崎浩治

「ねえサオリ、あたしの墓碑銘にはポーボワールの名言を刻んでちょうだい。`人は女に生まれるのではない。女になるのだ。オネエ所長、ここに眠る、。ほらこの通り、今日も女装でちゃんと女になれてるでしょ？」

「1ミリだって、なれとらんわ！」

「でもね、オネエは愛する人と一緒にお墓に入るのは難しい。サオリもあたしのお墓に入りなさいよ。親子なんだからさ」

「おっさんと親子だなんて一生の不覚。断固断る！」

「プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が金沢市内で聞き込み中だ。この日の市山はトロピカルな花柄ワンピースにガルボ・ハット、足元にパンプスを合わせて大人の女を気取った女装をしている。

今回の依頼人は「夫が生前、付き合っていた女を調べてほしい」という金沢市に住む尚子(67)である。夫の修二は3年前、定年退職後に再雇用で働いていた会社を64歳でリタイア、悠々自適の生活を送っていたが、2カ月前、激しい頭痛と吐き気を訴えて倒れ、そのまま帰らぬ人となった。くも膜下出血だった。

夫の訃報を友人知人に知らせようと携帯電話を調べたところ、「マキ」という女に宛てた複数のメールが見つかった。「君に会うのが楽しみだ」「君と会って私は生まれ変わった」などとハートの絵文字付きで記され、若い女性と一緒に自撮り写真も保存されていた。

「写真の彼女はどう見ても30代。自分の娘より若い女を愛人にするなんて依頼人の夫もなかなかやるよね。背が高く男前だし、若いころはきっとモテたんだろうな」

聞き込みの合間、写真を眺めながら沙織がつぶやく。市山が首をひねった。

「相手の女の電話番号が残ってないのはどうしてかしら。パソコンも含めて女からの返信メールがないのも解せないわ」

「SNSで連絡を取り合った形跡もない。会社の元同僚に写真を見せても心当たりはないというし、サラリーマン時代の部下ではなさそうね。趣味のサークルで出会ったのかな」

「夫は無趣味な人で、唯一の趣味が最近始めたウォーキングよ」

「それじゃ飲み屋関係……」

「昔は遊んだ人らしいけど、リタイア後はほとんど飲みに出てないわ」

「だとすると手がかりはこのメルアドだけか」

「調査は手詰まりね……いっそ相手の女に連絡してみまじょうか」

◇ ◇

「いま思えば、散歩の時に急にめかし込んだり、お土産を買って帰ったりすることもあって、現役時代なら`浮気だ！、ってピンと来たでしょうけど、70目前のおじいちゃんが女を作るなんて夢にも思いませんよ。それで相手はどういう女だったんです？」

「プライベート・リサーチ」にやってきた尚子が憔悴した表情で市山に尋ねた。

「メールで連絡がとれたの。写真の女性はデリヘル嬢だったわ」

「デリヘル嬢って……風俗の女ですか！」

「月に1～2度、ご主人が指名してラブホで会ってたそうよ」

「いい年をして汚らわしい！」

そう吐き捨てた後、尚子が震える声で続けた。

「結婚して40年。単身赴任が長かったから、若いころは女の一人や二人はいたと思います。いえ、一人や二人どころじゃありません。主人の浮気性にはずいぶん泣かされてきました。でも、それは見て見ぬふりをしてきたんです。家庭を守るために我慢しよう、と。定年して浮気は引退したと思ってたのに……」

「いまの60代はまだまだ若いわ」

「夫は退職後に生前墓を作ったんですよ。自分は次男坊だから本家の墓には入れないし、嫁に行った一人娘に経済的な負担をかけたくないからと。『夫婦で一緒に墓に入ろう』と言ってくれた時、うれしかったんです。二度目のプロポーズみたいで」

一息吐いた尚子の顔には、どんな表情も浮かんでいなかった。

「人生の半分以上一緒に過ごした夫に最後の最後でまた裏切られました。私、あの人と同じ墓には入りません」

その言葉には内に秘めた決意が感じられた。

「これまで何度も離婚を考えました。こんなことなら夫が活着ている間に離婚すればよかった。でも、もう離婚できないのですね……」

肩を落とした尚子を包み込むように市山が言った。

「参考までに教えるけど、あなたがどうしてもご主人と離婚したいのなら、`死後離婚、という手もあるわよ」

◇ ◇

会社勤めから解放された喜びは1週間も続かなかった。時間をつぶそうにも、これといった趣味はない。第一線を退いて1日の長さを痛感させられた。話し相手になるはずの女房は友だち付き合いで忙しく、週の半分は日中、留守にする。1日の大半をテレビの前で過ごす毎日に、このままではボケー直線だと危機感が募ってウォーキングを始めることにした。体力には自信があるので、金沢市内をあちこち歩く。そんなある日、白髪交じりの高齢男性が若い女性とラブホテルに入っていくところを目撃した。単身赴任時代、何度か利用したことがあるので「風俗だ」と閃く。それが生来の負けん気に火をつけた。

――仕事を辞めても「男」を定年したわけじゃない。黄昏れてたまるか！

その日のうちにネットで調べたデリヘルに電話し、指定されたラブホテルの一室にやってきたのが真紀(32歳)だった。離婚後、小学生の息子を育てているシングルマザーだという。初めて会った時に、こんな会話を交わしたのを覚えている。

「お客さん、年いくつ？」

「これでもギリギリ40代なんだよ」

「え、マジで？」目を丸くした真紀に、修二は答えた。

「40代は40代でも1940年代生まれだけだね」

「お客さん、面白い！」

真紀が無邪気に笑った瞬間、修二は恋に落ちたのだった。

年金は日々の暮らしに困る額ではないものの、現役時代のようにしばしば飲み歩くことはできないし、ましてや妾を囲うほど潤沢でもない。けれど月に一度か二度、ホテル代込みで2万円足らずのデリヘルを楽しむくらいの余裕ならあった。65歳になる直前に退職し、もらった失業手当を女房に内緒でヘソクリしていたからだ。

真紀と会うと胸が躍り、青春時代がよみがえった。とはいえ、若い盛りの色恋ではない。女にトチ狂って、のっぴきならない事態を招くほど無分別でないことは修二自身が一番よく知っている。人生の晩年に少しだけ味わう艶だった。

長年連れ添った女房に不満はない。単身赴任が長かった修二に代わって、一人娘を優しく素直な人間に育ててくれたのは尚子である。照れ臭くて口には出せないが、心から愛している。だからこそ、リタイアしてすぐに夫婦墓を作った。実家近くに霊園が売りに出て、マイホームを建てる気分で買ったのである。

「一緒に墓に入ったら、また新婚生活だな」

尚子に言ったその言葉にうそはなかった。

◇ ◇

「死後離婚……ですか？」

怪訝な表情を浮かべた尚子に市山が言った。

「法律上、死後離婚という制度はないのだけど、同等の効果を得られる手続きがあるのよ。夫の死後、妻は夫の戸籍にそのまま残る。でも役所に『復氏届』を提出すれば、旧姓に戻ることができるわ」

尚子が思案顔になって市山の言葉を反芻している。

「もし夫の親族と縁を切りたいのなら『姻族関係終了届』という手続きもある。復氏届と同様、提出期限はないし、夫の親族に承諾をもらう必要もないの」

「死後離婚したら夫の財産を放棄しなければならないんでしょう？」

「仮に死後離婚しても財産を相続する権利は失われないし、亡夫の遺族年金を受け取ることだってできるのよ」

「本当ですか！」

「ただし姻族関係終了届をいったん提出すると、縁を切った配偶者の親とは養子縁組をしない限り元の関係には戻れないから、よく考えて判断することね」

険しい目つきで虚空をにらむ尚子に市山が穏やかに問いかけた。

「ご主人が浮気していたことは、そりゃあ悪いと思う。でも生前墓を作っていたように、最後にはあなたの元に戻るつもりだったのではないかしら。それでもご主人を許すことはできないの？」

尚子の瞳の奥に暗い光が宿った。

「デリヘルの女と撮った写真がありましたよね？ あの時の夫、とても楽しそうに笑っていました。私には何十年も見せたことのない笑顔です。私という時はいつも仏頂面。あの笑顔だけはどうしても許せないんです」

その声に、逡巡の色はなかった。

◇ ◇

それから数カ月後、尚子の娘・咲恵(40歳)が「プライベート・リサーチ」を訪れた。母の代理で近況報告に来たのだという。

「父の実家は母が突然、死後離婚したのでカンカンですよ。もともと父方の親族とは疎遠な関係だったんですけどね」

さばさばした口調に尚子の決断をなじる響きはなかった。

「母の気持ち、よく分かるんですよ。子どものころから父の浮気で泣いている姿を何度も見してきましたから」

「お母様は元気？」

「とても元気ですよ。いま、お友だちと豪華客船で世界を回る旅に行ってます。でも私、ちょっと困ってるんですよ」

「どうしたの？」

「自分が死んだら散骨してくれ、と母が言うんです。昔、メリル・ストリープが出た映画の散骨シーンに感動したから、自分もあれがしたいって」

「『マディソン郡の橋』ね。最近、散骨する人が増えてきたわね」

眉間にしわを寄せた咲恵がしみじみと語り出した。

「私、同居している姑と折り合いが悪いんです。ダンナは姑の肩ばかり持つし、あの人たちと一緒にの墓には絶対に入りたくありません。だから、両親の墓に入れてもらおうと思ってました。うちは父が単身赴任で3人で暮らしたこと、あまりなかったから、死んだ後は家族仲良くお墓で暮らすのも悪くないかなって」

「なのにお母様はお父様のお墓に入るつもりはない」

「そうなんです。正直、父と私、二人きりのお墓なんて息が詰まるでしょ？ 死んでから息が詰まるもないんですけどね」

そう言うと、咲恵が開けっぴろげな笑い声を上げた。ここにも「死後離婚予備軍」が一人いる。心のなかでつぶやいた市山が口を開く。

「いつかお母様がお父様を許す日がくるかもしれないわ。死後離婚があるんだから、死後再婚、があったっていいものね」

夏のお盆の時期になり、市山と沙織が修二の墓参りに行くと、真新しい洋風墓はきれいに掃除してあり、花が供えられていた。誰が手向けたのかは分からない。